

近江八幡を離れて生活すると、日常で使っていたこの言葉が全く交わされなことに気がついた。何かの時に、何気なく「もったいない」と言ったら、怪訝な顔をされた。これは何度も経験した。故郷を離れて「もったいない」「始末する」「おきばりやす」は近江八幡特有の日常生活用語であると分かった。この日常言葉は、近江八幡の生活そのもの、近江八幡の精神だと思う」と述べている

ヴォーリス氏については「小学校低学年の頃だと思いが、一人の外国人が何時も自宅の前を通り、顔を見ると丁寧にあやめられた。母に尋ねると「あの人はヴォーリスさんと言う偉い人だよ」と教えてくれた。少年時代、近江兄弟社図書館は宿題を片付けるところであり、友と将来を語り合う場所であった」と述懐している。

長命寺川は梅花藻の群生地だった

義兄は昭和29年(1954)八幡中学校を卒業しているが、中学時代の長命寺川の思い出として「夏には「わたか」や「ハエ」釣りに、渡合橋へ行った。当時の渡合橋は長命寺寄りの北側の流れは急流だった。毎年夏になると橋の下で泳いだ。流れの速いところでは、流されないよう水草をつかんで潜っていたが、そこには梅の花に似た白い花が一面に咲いていた。白い花もあれば丸い蕾もある。とても綺麗で、水草を掴んで見とれていた。毎年、同じ場所に白い花が咲いていた」と言う。このことは義兄の脳裏に深く刻み込まれていた。そして「最近、醒ヶ井の地蔵川の清流に群生している梅花藻の写真をみて驚いた。記憶に残るあの花と同じではないか」義兄はこ

れを確かめるべく、島地域の人達、西川嘉廣氏、琵琶湖博物館の布施和夫学芸員、更に(株)ラーゴ取締役の西川博章氏らに何回も問い合わせしている。当時島コミュニティセンター長の辻純男氏にも問い合わせしている。

その結果「この四十年間、一九七〇年以降長命寺川に梅花藻があったという記録は無い。しかし五十年前、一九六〇年より前までのことであれば話は全く別である。記憶が正しければ梅花藻としか考えられない。もしそうであれば、これは大発見である」とその道の研究者から説明を受けている。義兄は、脳裏に深く刻み込まれた一面の梅の花に似た白い花を「やはり梅花藻だったのだ。五十年前、一九六〇年までの長命寺川は梅花藻の群生地だった」と確信したようだ。とにかくその当時の長命寺川は清流であったのだ。今はその面影を想像することさえ出来ない。

近江八幡を出ていった人達にとって、いつまでもその人達の「自慢の故郷」であり続けることが出来るよう、たまたまここに終の棲家を持つ者であっても、いやそうであるからこそ「自慢の故郷」を守り、伝えて行く、そんな使命もあるのではなからうかと思ふのである。



永原町通りを上筋からみる。交差点角には朝鮮人街道の道標がある

東近江ブロック交流研修会に参加

柳生 佳良子

今回の研修会は、自然と歴史文化の豊かなまち永源寺・愛東支部です。

午前中は開会式、来賓挨拶、『鈴鹿10座と奥永源寺山村景観』の講演を視聴する。

愛東コミュニティセンターで美味しい昼食を済ませ、それぞれのコースへとバスに乗り込んで現地にむかいました。

私は①—Aコース

「戦国から元禄へ」・争いと癒しの空間  
(行程)

カガシの畑 ↓ (車窓より) ↓ 羊の郷  
長寿寺 ↓ 信長駒つなぎの松 ↓ 信長側室お鍋の屋敷 ↓ 愛東コミュニティセンター

TVで紹介された、案山子か人か見分けの付かない畑を車窓から見とつてもユーモアなセンスに感心しました、次に羊の声に癒され、なんとおらかな地域ともおもいました。